

近代日本版画家名覧 (1900－1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

| | |
|----------------------|---------------------|
| 岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授） | 植野比佐見（和歌山県立美術館学芸員） |
| 加治幸子（元東京都美術館図書室司書） | 河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長） |
| 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員） | 西山純子（千葉市美術館学芸員） |
| 三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長） | 森 登（学藝書院） |
| 樋口良一（版画堂） | |
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (17)

【に】

新居多美子 (にい・たみこ)

1934 (昭和9) 年9月17日より1週間、西田武雄を講師に招いて文化学院エッチング教室で行われた文化学院専修科対象のエッチング講習会 (生徒7名と特別参加の中華国人1名) に参加。その時に制作したと思われる《[川のある風景]》が『エッチング』26号 (1934.12) に図版で掲載されている。【文献】『エッチング』24・26 (樋口)

新津光重 (にいっ・みつげ)

1936 (昭和11) 年に『創作版画集 曼荼羅』(限定50部木版8点入) を出版している。山梨県中西郡甲西町出身か。詳細は不明。【文献】『版画堂目録』62 (2003.9) (樋口)

新美 (新見) 健一郎 (にいみ・けんいちろう)

1922 (大正11) 年に神戸弦月画会主催で開かれた創作版画展 (2.23～26 神戸・三宮三〇九番館) に木版画《北港ニテ》5点《林檎》3点《風景》2点《木立》《顔》2点《小品》4点の計17点を出品。翌1923年の第5回日本創作版画協会展にも木版画《泊海岸砂丘》が入選。いずれの出品時にも神戸に住む。また目録には、前者は「新見」、後者は「新美」とある。【文献】『[神戸弦月画会主催] 創作版画展覧会目録』(1922) / 『第五回日本創作版画協会展覧会目録』(1923) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

新美忠治 (にいみ・ちゅうじ)

愛知県知多郡の半田第一尋常高等小学校に勤務。同郡内の亀崎第一尋常高等小学校では、同校教諭大岩忠一の世話により平塚運一を講師とする版画講習会が、1928年7月、1931年7月、1933年7月、1936年11月などに開かれているが、1928年の第1回目の講習会から参加か。この講習会をきっかけに版画団体「版刀会」が生まれ、講師平塚運一の一字を雑誌名とする版画誌『運』(1928～1937 現在5～7・10号の4冊が確認) が刊行されたが、現在確認されている号のうち第5号 (1931) に木版画《暑中見舞い状》《柘榴》など7点、第10号 (1937) に《葦草》を発表。また、1936年の版画講習会をきっかけに「版刀会」とは別に、「更閑会」と称する版画団体も生まれ、1937年から1944年まで作品集 (賀状集) を毎年刊行したが、同会にも参加している。公募展へは、1938年の第7回日本版画協会展 (目録は「新見」とあるも誤り) に木版画《古城の秋》《鳥の初夏》が初入選。その後も第8回展 (1939) に《伊良湖崎》《漁港》、第9回展 (1940) に《橋杭岩》を出品した。【文献】加藤祐子「平塚運一による版画教育普及活動の一端：版画講習会開催とその余波 - 愛知県半田市亀崎を例に -」『版画家・平塚運一の世界展』図録 (高浜市やきもの里から美術館 2003) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

新見藤司 (にいみ・とうじ)

愛知県半田町の教員仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号 (1931) に植物を描いた木

版画 (題名不詳) 2点、第6号 [1931か1932] にエンドウを描いた木版画 (題名不詳) を発表。第10号 (1937) には《壺》を発表するも、調査した時点では、作品は欠落のため未見。現在『運』は5～7・10号 (1931～1937) のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

新納時千代 (にいの・ときちよ)

金熙明が主宰編集し、1926年8月に『野獣群』を創刊 (1927年1月に2冊目を発行) したアナーキストのグループの同人として活動した。同グループ同人の有泉讓・阿部貞夫が「野獣群 美術号」として編集・発行した『構成派』創刊号に「カフェにて彫る」と題する木版画 (リノカットか) を寄せた。1926年5月に、東京府美術館で開催された聖徳太子奉賛美術展覧会に対抗して横井弘三が主宰開催した「理想大展覧会」の出品目録に「●新野時千代● (装飾業) / 府下中野町谷戸二四〇五 / 料理胃腸菌悩殺の効ある珍奇怪味さわりなき新食料の即製即売 未定 [価格]」とあり、同一人物と推定。【文献】滝沢恭司「横井弘三の理想大展覧会について」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005) / 『創作版画誌の系譜』(滝沢)

仁志定治 (にし・さだじ)

郷土玩具蒐集家として知られる清永完治 (1896～1971) が釜山在住時代に刊行した「釜山郷土玩具同好会」の機関誌『土偶 (志)』(1935.8～1942.8 20冊) の第3期第1号 (1937.2) に版画作品を発表。仁志は同号消息欄に「このところ版画に非常に興味が出まして盛に彫って居ります」と記し、その後も1940年3月高松に転住するまで同誌に版画作品を発表したという。【文献】辻 (川瀬) 千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (5) - 釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について -」『名古屋大学博物館報告』32 (2017) (樋口)

西尾喜太三 (にしお・きたぞう)

1937 (昭和12) 年7月に福岡市西中州県公会堂で開催されたエッチング講習会 (29～31 講師：西田武雄 主催：福岡文房堂) に参加。その講習会で制作したと思われる水辺の風景を描いた銅版画が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第58号 (1937.8) に掲載されている。また、同号にはエッチングに興味を持った経緯や過去の大家の作品の感想、今後の目標等についての「西田先生」と題した小文も寄稿している。なお、文中には研究所製プレス機を購入した旨が記されていて、事実プレス機所蔵者名簿 (『エッチング』58) に掲載されているが、その後の作品は確認できず。当時、西尾は日本勧業銀行の福岡支店長の役職についており、西田は同誌第59号 (1937.9) 掲載の「エッチング講習旅行記 (2)」で「西尾氏は水彩画家なり。その作に接し得ざるも三十年も絵具屋に奉公せりと」と記し、その技量を評価しつつ、日本の実業家として、「忙中閑。否エッチングは閑に非ず、労なり。即ち勤中労なり。(中略) 自然ととりくみ絵技に精進せんとするもの暁の星より少なし。福岡に過ぎたるもの一つあり勸銀の支店長なるべし」と賞賛している。『エッチング』第60号 (1937.10) の「研究所通信」には10月3日に西尾が研究所に来訪したとの記事あり。当時は福岡市鳥飼町に在住。【文献】『エッチング』57～60 (加治)

西尾迪雄 (にしお・みちお) 1906～1974

1906(明治39)年愛知県岡崎市康生町に生まれる。家業を手伝いながら、絵画を習う。当時、岡崎では西洋画への関心が高まり、1925年に近藤孝太郎・杉山新樹・山本敏太郎らが洋画研究会「我々の会」を結成し、第1回作品展覧会(1926.4.14～20 岡崎図書館)を開催する。西尾も同人となり、油彩画《静物》5点を出品する(『試作』2-2 1926.5)。同年近藤から影響を受けた小野英一・村松隆次・村松ふさは版画同人誌『版画』を創刊。第3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、『試作』(1925～1926)と改題する。西尾は『試作』の同人となり、第1年1号(1925.6)に《雪景》、第1年2号(1925.8)に《挿画「習作」》《夏の海》と表紙絵《畠》、第1年3号(1925.12)に《風景》、第2年1号(1926.2)に《道》《風景》、第2年2号(1926.5)に《木》、第2年3号(1926.7)に《海岸》を発表する。1926年当時も岡崎市康生町に在住。戦後は岡崎美術展洋画部の審査員を務め、市内で絵画教室を開き、新人育成にも尽力を惜しまなかった。1974(昭和49)年に逝去。なお、「迪雄」のほかに「路雄」や「道雄」を使用している。【文献】『近藤孝太郎とその周囲 版画を中心として』展図録(岡崎市美術館 1983)／『創作版画誌の系譜』(加治)

西岡真一 (にしおか・しんいち)

大正期の口絵画家。須藤南翠『闇のうつつ』上下巻(樋口隆文館 1913)に木版口絵を制作。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)(樋口)

西垣敏捷 (にしがき・としかつ)

大阪では1933(昭和8)年に前田藤四郎や武田新太郎らが中心となって版画同人誌『黄楊』を発行する。その創刊号(1933.8)に《雁首草》を発表。「下手なスケッチにみたされた画稿の中に見出したのが此雁首草であった、それは創作版画の型に当てはめるには風変わりな屈強の草であったからである」と「作者言」に言葉を寄せている。『黄楊』は創刊号のみ確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

西川一草亭 (にしかわ・いっそうてい) 1878～1938

1878(明治11)年1月13日、京都市上京区(現・中京区)押小路麩屋町橘町で生花商「花源」を営む傍ら、華道去風流六代目家元であった西川源兵衛(一葉)の長男として生まれる。本名は源次郎、「一草」は華道名。2歳違いの弟に津田青楓がいる。1891年四条派の絵師竹川友広から運筆を学ぶ。1904年蒔絵師杉林古香、津田と「小美術会」を結成し、4月から12月にかけてB4判の図案雑誌『小美術』(6冊)を刊行するが、津田の応召と資金難から1年で廃刊する。一草亭は「序」で「小美術は因遁姑息なる今の図案界に真率の研究を積みて大いに斬新の趣味を鼓吹せんとする小美術会機関雑誌なり」として、各冊に収録した各人の図案は芸艸堂の多色木版によっている。1号創刊当初の4月、同誌を持参して1902年から京都高等工芸学校教授となった聖護院の浅井忠を訪ね、批評を乞う。浅井から強い刺激を受けると共に、浅井を顧問格と目して交流を深める。6冊中には一草亭の図案《水車》《紅款冬》《鴨》《皀月百合》《長尾鶏》等14図を掲載する。いずれも浅井忠の影響を受けたアールヌーヴォー風の斬新な図案を描いている。後に1907年頃『小美術』の図案を纏めて『小美術図譜』が芸艸堂から刊行された。浅井との交

わりから武田五一・藤井厚二等と交友すると共に、彼等から影響を受ける。1904年頃から挿花教授を始め、浅井・高安月郊・都鳥英喜・幸田露伴等に生花を教える。1911年には津田を介し、夏目漱石を知り、以後、漱石の句に「牡丹剪つて一草亭を待つ日哉」という交流を結ぶ。1913年去風流七代目を継ぎ、1917年に発刊した流派の機関誌『去風洞社報』を、1930年『瓶史』と改名して挿花芸術季刊誌とし、その編集を手がける。画集に『一草亭畫譜』(五彩洞 1922)、『第一畫集』(津田と共作 1930)、『一草亭第三畫集』(1935)があり、著書に『茶心花語』(実業之日本社 1931)、『風流百話』(創元社 1933)等がある。華道の他、茶道・焼き物・造園等にも才能を発揮する。1938(昭和13)年3月20日洛東浄土寺の自宅で逝去。【文献】『花道去風流七世 西川一草亭 風流一生涯』(淡交社 1993)／『津田青楓の図案 芸術とデザイン』(芸艸堂 2008)／『浅井忠の図案—杉林古香関連図案』展図録(佐倉市立美術館 2015)(森)

西川藤太郎 (にしかわ・とうたろう) 1906～1991

1906(明治39)年7月6日京都市下谷区に生まれる。1921年から親戚筋の漢学者・篆刻家の酒井支山に師事し、篆刻の道に進む。翌年より支山の影響で木口木版を始め、1927年川端画学校日本画部に入学し、1930年卒業。展覧会へは、1936年第5回日本版画協会展に《てうせんあざみ》《けいとう》(石刻版)が初入選。以後、第6回展(1937)に《罌粟》《静物》、第7回展(1938)に《とり》(石刻版)《ざくろ》、第9回展(1940)に《蔵書票・家、船》、第12回展(1943)に《静物》を出品。1944年には会友に推挙された。また、創作版画誌へは、1937年の『白と黒』(第三次 白と黒社)第1年2号(1937.3.1)に《青麦》、第1年3号(1937.5.1)に《部屋の一角》を発表したほか、刊行年は不明であるが『版画蔵票』(白と黒社 1937～1938頃か)第1号に《ランプ》、第2号に《装画(鷹羽氏用)》、第4号に《洋燈(大矢氏用)》、第5号に《水鳥の図(川口稔氏用)》を発表した。戦後は第23回日本版画協会展に再び会友として《渚》《散歩する傘》を出品。その後も出品を続け、1968年の第36回展で会員に推挙された。1978年には『木口木版版画集 懐古帖』(1978.7 私家版 限定70部)を刊行。1991(平成3)年12月8日東京都で逝去。翌1992年の第60回記念日本版画協会展に遺作《盧遮耶佛在す東大寺金堂(大佛殿)》《ランプ》《新春迎客炉》《四ツ玉時計》が並んだ。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『第60回記念日本版画協会画集』(1992)／『日本の木口木版画—明治から今日まで—』展図録(板橋区立美術館 1993)／『創作版画誌の系譜』(三木)

西川正信 (にしかわ・まさのぶ)

1923(大正12)年5月の第5回日本創作版画協会展に木版画《風景》が初入選。翌1924年11月の第6回展にもリノカット《風景》を出品。出品時は大阪に住む。また、旭正秀らの『詩と版画』第3輯(詩と版画社 1923.7)に木版画《冬の並木道》、第12輯(1925.7)に木版画《エクス・リプリス》を発表した。【文献】『第五回日本創作版画協会展覧会目録』『日本創作版画協会第六回展覧会目録』(1923・24)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『創作版画誌の系譜』(三木)

西澤笛畝 (にしざわ・てきほ) 1889～1965

1889 (明治 22) 年 1 月 1 日東京浅草に生まれる。本名は石川昂一。1913 年荒木寛畝に入門。寛畝没後は荒木十畝に師事する。1913 年人形玩具の蒐集家として知られる実業家・西澤米次郎 (号・仙湖) の長女・勝子と結婚、西澤姓となる。師風を継承し、花鳥画を得意とする。第 9 回文展 (1915) に《八哥鳥の群れ》が初入選、以降は文展・帝展・新文展・日展などに出品を続ける。この間、日本画制作の傍ら、義父仙湖の影響をうけ、内外の人形の蒐集・研究にも熱心で、自家珍藏の雛人形百種を描いた『雛百種』上中下 (1915 解説含 4 冊) や『端午玩具集』上下 (1925)、『人形集成』第 1～10 輯 (1932 100 図内木版 20 図)、『御所人形十二題』(1939) などの木版画集をいずれも芸艸堂から刊行。「にんぎょう博士」と呼ばれた清水晴風が出版した玩具画集『うなゐの友』初編 (1893.10) から第六編 (1913.6) を、清水没後は芸艸堂の勧めで西澤が引き継ぎ、第七編 (1917.5) から第十編 (1924.8) まで完成させる。また 1931 年には人形研究家・山田徳兵衛 (人形問屋吉徳の第 10 代当主) や石井柏亭・笹川臨風らとともに「童宝美術院」を結成し、「童宝美術院展覧会」を開催。1936 年には自宅に人形玩具の研究所「西澤童宝文化研究所」を設け人形芸術の普及をめざした。これまで蚊帳の外に置かれていた人形を「美術」として位置付けるべく奔走し、1936 年 2 月の改組第 1 回帝展第 4 部美術工芸に鹿兒島寿蔵・堀柳女など 6 作家、同年 10 月の昭和十一年文展第 4 部美術工芸に久保佐四郎・高濱かの子など 6 作家の人形が初入選をはたすなど昭和初期の人形芸術運動を主導した。『大東亜玩具史』(大雅堂 1943)、『日本郷土玩具事典』(岩崎美術社 1965) などの人形玩具に関する研究書も多数著作し、人形玩具研究者としても知られる。文化庁の無形文化財保護委員会専門審議委員、日本工芸会初代理事長を務めるなど晩年まで人形芸術の発展に尽した。1965 (昭和 40) 年 10 月 24 日逝去。人形に関わるもの以外の版画としては、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』第 9 輯 (義士出版会 1921) に《征雁一聲》1 図と磯田長秋・川崎小虎ら 6 作家による『大正震災木版画集』(東京湯島・画報社 1924 全 36 景) に《黄昏の日本橋》《震災後の三越》《震後のニコライ堂》《焼残りたる浅草観音堂》《国技館炎上》《八幡宿噴水》の 6 景が知られる。1943 年日本版画奉公会会員。没後に西澤コレクションの一部 4,300 点ほどがさいたま市の所蔵となり、2020 年日本初の人形専門公立博物館として「(仮称) 岩槻人形博物館」の開館が予定されている。【文献】『美術週報』2-32 (1915.5) / 『美之國』13-2 (1937.1) / 『版画にみる東京の風景—関東大震災から戦前まで—』展図録 (大田区立郷土博物館 2002) / 『人形に捧げた生涯 西澤笛畝の足跡』展冊子 (さいたま市文化施設建設準備室発行 うらわ美術館 2015) / 『エッチング』123 (樋口)

西澤哲村 (にしざわ・てっそん)

武井武雄が主宰する年賀状交換会「第一回版交の会」(第三回からは「榛の会」と改称) の会員 (1935) で、当時の住所は「兵庫県武庫郡芦屋 藤ヶ谷荘園内」。また昭和 10 年代頃と思われる小川茂麻呂画による西澤哲村蔵版の木版絵葉書集『劇に因む宝船』第 1 集～第 3 集 (各 2 葉組) の刊行が知られる。【文献】『第一回版交の会 会員〔名簿〕』(1935) / 菟堂版画目録『浮世絵 現代版画』38 (1997) (樋口)

西島 亮 (にしじま・とおる)

長野県長沼の小学校教員か。1930 年の第 5 回一九三〇年協会展に油彩画《吉祥寺風景》が入選。1933 年夏に須坂の小林朝治が平塚運一を講師に招いて開催した版画講習会に出席か。この講習会をきっかけに結成された「信濃創作版画研究会」(上高井郡須坂小学校内) に参加。同会の発行する版画誌『櫟』の第 1 輯 (1933.8.11) に木版画《裸婦》を発表。その後も第 2 輯 (1934) に《賀状》(賀状の住所は「信州上水内郡長沼村」とある)、第 3 輯 (1934.7.1) に《冬田》、第 4 輯 (1934.11.20) に《郷津風景》、第 5 輯 (1935.4) に《賀状》、第 8 輯 (1935.12) に《砂丘》を発表。また、小林が 1934 年 6 月に「下水内手工研究会」(下水内郡秋津小学校内) で開いた第 2 回版画講習会の開催に協力。同研究会の発行した版画誌『葵』第 1 号 (1934.9.20) に《鳶尾》(名前の表記は「西嶋」) を発表した。県外では、東京の料治熊太の主宰する『白と黒』第 43 号 (白と黒社 1934.1.1) に《冬田》、第 44 号 (1934.2.1) に《駅小景》、第 45 号 (1934.3.1) に《小品》、第 46 号 (1934.4.1) に《佐渡風景》、『版芸術』第 23 号万国国民芸土俗玩具号 (1934.1.1) に《二頭立馬車 (ロシヤ)》、第 24 号続万国国民芸土俗玩具号 (1934.3.1) に《人形の家 (ドイツ)》を発表。また、青森の『陸奥駒』第 16 集 (夢人社 1934.12.30) に《年賀状》を発表した。その後、1935 年の第 4 回日本版画協会展にも木版画《風景》4 点が入選している。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

西田數雄 (にしだ・かずお) 1908～没年不詳

1908 (明治 41) 年の生まれ。本郷絵画研究所で岡田三郎助に学ぶ。1927 年の第 4 回白日会展に油彩画《雪》が入選。その後も第 5 回展 (1928) に版画《乃木坂風景》、第 7 回展 (1930) に版画《裸婦》、第 8 回展 (1931) には油彩画《椿》を出品したが、版種は不明。また 1929 年の第 16 回光風会展に油彩画《裸女》が入選。他に春台美術展・第一美術協会展にも出品していたようである。1932 年から 4 年間渡欧。帰国後は青木大乘の主宰する「新燈社展」にも出品し、後に同人となった。また、1942 年の第 2 回航空美術展に油彩画《航空總監賞と弟》、翌 1943 年の第 3 回展にも油彩画《雨下の鵬翼陣》を出品した。1944 年頃は兵庫県西宮市羽衣町に住む。【文献】『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944.3) / 『白日会展総出品目録 (第 1 回～第 59 回)』(白日会 1984) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

西田小一郎 (にしだ・しょういちろう)

1931 (昭和 6) 年 8 月に大分で開かれた「創作版画講習会」(3～7 大分県師範学校 講師: 平塚運一 主催: 東京版画倶楽部) に参加。作品は未見。【文献】『郷土図画』1-5 (大分県美育研究会 1931.10) (三木)

西田 英 (にしだ・ひで)

1941 年 3 月、大阪在住だった銅版画家・高羽敏が中心となって開催された西田武雄を囲む「エッチャー小集」に、中井平三郎 (京都)・武藤完一 (大分)・今井退蔵 (神戸)・西村貞 (大阪) らとともに参加する。作品は未見。【文献】武藤隼人『版画家・武藤完一資料集 (戦前篇 I) — 作家年譜を中心として —』(東京学芸大学大学院教育研究科修

西田武雄 (にしだ・たけお) 1894 ~ 1961

1894 (明治 27) 年 7 月 11 日三重県一志郡七栗村大字森に生まれる。6 歳の時、横浜の大川福松の養子となり横浜での生活が始まるが、戸籍は西田姓を使用。1909 年横浜商業学校に入学。在学中に美術に興味を持ち、日本水彩画会研究所横浜支部に通い、大下藤次郎・水野以文に学ぶ。1913 年の第 1 回日本水彩画会展に《支那町の午後》を出品。同年の日本水彩画会研究所横浜支部の解散を受け、翌年には小石川区水道橋の日本水彩画会研究所の近くに下宿し同研究所に通う。同年第 8 回文展に水彩画《倉入れ》が入選。1915 年 3 月には横浜商業学校からの卒業証書を得ることができぬまま、徴兵検査のために帰郷。同年 5 月第 2 回日本水彩画会展にペン画《母の顔》が入選。12 月台湾歩兵聯隊に入隊し、1917 年に兵役を終えて帰郷。翌年上京。本郷洋画研究所に入所し、岡田三郎助の指導をうける。1919 年頃よりエッチングに興味を持ち独学で努力するが理解できないことがあって、岡田に教えるを願うと共に、東京美術学校製版科主任結城林蔵を紹介してもらい、エッチングの習得に努める。1911 年の第 3 回日本創作版画協会展にエッチング《寂しき卓子》《自画像》《裸体素描》を出品。同年、友人の勧めで、中国旅行をする。1922 年 8 月帰国。大久保百人町に住み、ロンドンより取り寄せた銅版画プレス機を組み立て、エッチング研究に没頭。1923 年の『みづゑ』に「エッチングの描き方」を連載するまでになる。この頃から『みづゑ』『アトリエ』を中心に執筆活動を開始。同年 5 月の第 5 回日本創作版画協会展にエッチング《寂しき松》の出品を最後に公募展への出品を止める。この頃まで活動の主軸は、画家として独立するための努力であったが、9 月 1 日の関東大震災との遭遇、次いで 11 月の室内社画堂開設によって、画廊主人・経営者としての活動に主軸を置いて行く。

室内社画堂は丸ビルから、翌年 (1924) 3 月に京橋の日米信託ビル 2 階に移転し、同ビル内に展覧会会場を併設し、岡田三郎助・中沢弘光・石井柏亭・田辺至等の個人展の他、西洋美術展・諸大家小品展等々の企画展を開催する。一方で、1927 年にエッチング研究者にプレス機を貸与したり、月 2 回程の出張授業を行ったりしてエッチングの普及活動も行う。同年 12 月に室内社画堂は麹町区麹町に移る。1931 年 2 月室内社画堂脇に、銅版画家の育成とエッチングの啓蒙活動のため、加えて前年に出版した著書『エッチングの描き方』(木星書院)の反響に後押しされて、「日本エッチング研究所」を設立。さらに同年『西田武雄デッサン集』(春鳥会)、『西田武雄エッチング集』(室内社画堂)を出版した。翌 1932 年には美術雑誌『エッチング』(126 号からは日本版画奉公会の機関誌として『日本版画』と改題、133 号 (1944) で終刊)を創刊。同誌はエッチングの普及を根幹に置きながら、創作版画・近代美術史に関する資料の紹介、さらに戦時下の版画家達の動向を知る上で貴重な雑誌となる。1931 年から『みづゑ』に連載していた「画工志願」をまとめ、1933 年に日本エッチング研究所出版部より刊行。また『エッチング』誌上に数多くの明治美術資料を発掘・紹介し、1935 年の『アサヒグラフ』に「回顧 70 年明治初期洋画」を執筆した他、平木政次著『明治初期洋画壇回顧』(1936)を日本エッチング研究所から出版し、序を執筆するなど、明治美術の紹介者としての位置を明らかにする。

日本エッチング研究所設立趣意書 (1931) に「エッチ

ングの研究を画堂経営のかたはら、続けてゆきたいと思えます」と述べているが、全国各地を巡回してエッチングの講習会を開催し、多くの銅版画家を育てた事一つを取り上げて、その活動は「傍ら」などとは思えない活躍ぶり、実質的な成果を上げていく。1938 年に謄写版インキの製造販売を目的とした広山インキ製造所を設立。一時期今純三・関野準一郎も携わる。1940 年田辺至を会長に迎え、「日本エッチング作家協会」を設立し、会員・準会員は合わせて 21 名を数え、評議員には今純三・曾我尾武治・中井平三郎・武藤完一・西田の 5 名がなる。同年 12 月に資生堂で第 1 回エッチング展を開催。以後、1941・42 年と計 3 回の展覧会を開催。1943 年 5 月、大政翼賛会文化部の指導の下、「日本版画奉公会」(会長：岩倉具栄)が結成され、常務理事として活動。事務所は麹町の西田方に置かれる。1945 年に室内社画堂が戦災に遭い、郷里の三重県一志郡柙原に疎開。敗戦を郷里で迎え、以後、東京に戻ることなく定住する。この頃から使用される号の「半峰」(はんぼう)は、日本版画奉公会の略語「版奉」を振ったもの。郷里では、地元の新聞や雑誌に寄稿していた他、1948 年に『美術手帖』に「絵の値段」を執筆する。1952 年 1 月 1 日から絵葉書 5 万通を目標に描き、各地の知友に、没年まで送り続けるが、結果的には 26,744 通であった。1960 年に名古屋 CBC テレビで「半峰の生活」が放映される。翌 1961 (昭和 36) 年 7 月 26 日逝去。戦後は美術的活動からは遠ざかっていた。【文献】今井貞吉「画人西田半峰」『芸術三重』16 (三重県教育委員会 1977) / 島田康寛「西田武雄と『エッチング』」・「西田武雄年譜」(復刻版『エッチング』別冊 臨川書店 1991) (河野)

仁科宗一郎 (にしな・そういちろう)

長野県安曇郡の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画同人誌『黄樹』(1937 ~ 1938)を発行した。その創刊号 (1937.3) に《ドンド焼》、第 2 号 (1938.5) に《窓》を出品。当時、北安曇郡池田小学校に勤務。戦後、『信濃池田町史話』(柳沢書苑 1964)、『池田町歳時記：年中行事』(柳沢書苑 1980)などの執筆や池田町有線での史話を通じて池田町の民俗・文化財の紹介を行っている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

西村ソノ (にしむら・その) 1918 ~

1918 (大正 7) 年 4 月 12 日西村伊作の四女として和歌山県新宮町に生まれ、その後、一家は上京する。父・伊作は、1921 年東京で各種学校として文化学院を創設し、自由主義教育を実践。ソノも入学し、教育を受ける。同学院の専修科では 1933 年の秋からエッチング講習会を行なうようになり、女学部でも 1934 年 3 月 7 日、赤城泰舒の指導のもと、日本エッチング研究所の西田武雄を講師に招き、エッチングの実習 (受講者 10 名) を行った。女学部 3 年在学中のソノも受講し、その時制作した人形を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第 17 号 (1934.3) に掲載されている。卒業後は外交官の娘の教育係兼話相手としてプラハに渡航。外交官一家が帰国した後は、プラハ総領事館に勤務する杉原千畝 (ユダヤ人にビザを発行) の子供の家庭教師となるも、杉原がドイツに赴任したため、ソノはウィーンに移り、絵画の勉強をつづけた。第二次世界大戦中も帰国せず、戦後も海外で生活を送っている。近年は結婚し、ソノ・西村・ベガートとなり、文

化学院に關係する美術家作品を展示するルヴァン美術館（長野県軽井沢町）の館長を務めている。【文献】『エッチング』12・17 / 「西村ソノ 戦時下の欧州を勇氣と美貌で生き抜いた女性」（インターネット検索 2017.6.30）（加治）

西村常雄（にしむら・つねお）

戦前の朝鮮において、詩人・内野健児（1931年からは「新井徹」のペンネームを使用）が創刊した文芸誌『耕人』（耕人社 1922.1～1925.12 全45冊）に西村は創刊号より詩・戯曲・童謡・感想などを発表、第3巻第4号〔28号〕（1924.4）では農耕風景を描いた表紙絵を自刻木版画で制作する。同号「終記」に「多田〔毅三〕氏から表紙画を戴いたが製版の都合上西村氏の木版の方を先に用ふることになった」とあり、以降も第3巻第12号〔36号〕（1924.12）まで自刻木版画で街や郊外風景、耕作する農夫などの表紙絵を制作。第4巻第1・2号〔37・38号〕（1925.1・2）では扉絵〔自刻木版〕を担当（表紙絵は多田毅三）、第4巻第6・7・9号〔42・43・45（終刊号）〕（1925.6～12）で再び自刻木版画による表紙絵（『壺』《ホイットマン》《秋の朝》）を制作している。第1巻第4号（1922.5）の「耕人支社」欄によると、当時の住所は「福岡県直方町壽館横」（その後「同町外正牟田櫻屋前」に移る）で、西村は当時福岡県直方で活動していたらしい。なお、渡鮮（1921.3）以前の内野は、1920年3月県立広島高等師範学校卒業後、同年5月応召されるまで福岡県直方市の県立鞍手中学校の国語教師をしており、あるいはこの頃に西村との出会いがあり、西村が『耕人』と関わるようになったとも考えられるが、詳細は不明。【文献】『耕人』1～45（耕人社 1922.1～1925.12） / 「内野健児年譜」『海峡』7（社会評論社 1978.3） / 辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開（2）—京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末—」『名古屋大学博物館報告』31（2016）（樋口）

西村 貞（にしむら・てい）1893～1961

1893（明治26）年12月12日大阪市に生まれる。在野の美術史家として知られる。松原三五郎に洋画を習い、京都市立絵画専門学校に学び、明治大学を中退。最初は主にルネッサンス絵画を研究し、『文芸復興期の美術』（聚英閣 1921）を出版。1921年から1923年にかけて欧州遊学。帰国後は、日本美術の研究に転じ、奈良県下の石仏を調査。その後は茶道・庭園・初期洋風画などについても研究を進めた。著書に『南都石仏巡礼』（太平洋書房 1929）、『奈良の石仏』（全国書房 1943）、『日本初期洋画の研究』（全国書房 1945）、『キリシタンと茶道』（全国書房 1948）、『南蛮美術』（講談社 1958）などがあり、1954年には『民家の庭』（美術出版社 1953）で第9回毎日出版文化賞（人文・社会部門）を受賞している。版画に関しては、神戸の南蛮美術の蒐集家池長孟との交流から1925年頃よりわが国の初期銅版画に関する論文を発表し、それらの論考をまとめた『日本銅版画志』（書物展望社 1941 全国書房）が知られているが、若い時には作品も制作し、1913年に彫刻家の天岡均一らと第1回雑草社作品展（7.18～20 堺・大沢陶器店）を開催し、油絵・版画・団扇絵を出品。また同年、東京で片岡鐵兵・上羽秀夫と「路上社」を結成。三人誌『路上』処女号（編修発行人：上羽秀雄〔夫〕 12.10）に木版画《郊外の日曜》《十二階下の女》《MERRY-GO-ROUND NO ONNA 木馬館の女》（3点とも職人摺、貼り付け）、ペン画図版《裏坂町の

女》《浅草のとある夜》《東横堀川の一部》、木版カット《瓶》、詩、論文などを発表している。次号の予告があるも未刊か。1961（昭和36）年3月3日京都市で逝去。【文献】『みづゑ』103（1913.9） / 『日本美術年鑑』昭和37年版（東京国立文化財研究所 1963） / 『創作版画誌の系譜』（三木）

西村俊夫（にしむら・としお）

1931（昭和6）年の第4回プロレタリア美術大展覧会（11.28～12.13 東京自治会館）に版画《赤色野球聯盟を作れ》、ポスター《ソヴィエトロシアへ労働者代表を送れ》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

西村蒲堂（にしむら・ほうどう）

Japan Print Gallery（Notting Hill Gate, London）の調査によると、1935～1941年頃にかけて、版元・竹村秀雄から「蒲堂」名で《桜とハト》《蓮》《木蓮とべにとおうむ》など多数の花鳥画の木版画が刊行されているが、これらは大正期の頃に制作された小原祥邨などの輸出用木版画や昭和初期にマリア画房（京都）から刊行された千種掃雲・土屋楽山の洋草画譜や花鳥画譜を模刻したと思われる作品が多いとの指摘がある。竹村秀雄は昭和初頃から戦中にかけて横浜で版元兼販売活動を行っていたようだが、「西村蒲堂」の経歴も含め、詳細は未調査。【文献】「The Japanese Art Open Database」〔JAODB item details 2017.7.25〕（樋口）

西村真琴（にしむら・まこと）1883～1956

1883（明治16）年3月26日長野県東筑摩郡松本に生まれる。植物学者であり、マリモの研究や人型ロボット「学天則」の製作などでも知られる。1904年県立松本中学校を卒業。広島高等師範学校へ進み、1908年同校博物学科を卒業。京都府乙訓郡向日町小学校の代用教員となり、のちに同校校長となる。1910年満州に渡り、遼陽の小学校校長を経て南満州医学堂（後の奉天医科大学）の生物学教授となる。1915年渡米。コロンビア大学に学び、1920年同校の博士号を取得。1921年北海道帝国大学附属水産専門部教授となり、1927年阿寒湖のマリモの研究で東京帝国大学より理学博士号を取得。同年退官した。洋画・版画の制作は、この北海道帝国大学水産専門部教授時代のことである。1923年10月に学内の美術団体である「黒百合会」の第16回展に初めて出品。1925年には北海道大学予科学生の外山卯三郎らによって「札幌詩学協会」が創立され、同人誌『さとぼろ』が創刊（1925.6.1）されたが、同誌の第3号（1925.8.1）から参加し、第19号（1927.12.5）まで版画や詩など発表。また、第14号（1926.12.20）からは編集発行人となり、16号（1927.3.8）まで担当している。同誌に発表された木版画は、第3号（1925.8.1）に《バンジャラスの祈》、第4号（1925.9.1）に《夜を眠る猫》、第5号（1925.10.1）に《森に送らるる音楽家》《ふたり静》、第6号（1925.11.1）に《十戒》《油の心》、第7号（1926.1.1）に《白鳥》、第9号（1926.3.5）に《氷柱》、第10号（1926.5.5）に《地上の或日》、第11号（1926.7.5）に《表紙》《裏表紙》《生命の縞》、第12号（1926.10.1）に《常在》、第13号（1926.11）に《神の火》、第14号（1926.12.20）に《ともしび》、第15号（1927.1.18）に《扉絵奉追》《無題》、第16号（1927.3.18）に《表紙》《扉絵》〔同一作品〕、第19号（1927.12.5）に《土から》であった。またその間、1925年の「北海道美術協会」結成には名誉会員として参加。9月の札幌詩学協会

主催の第1回版画展(25~27 札幌商業会議所)に木版画《森に送らるる音楽家》《詩を見る人》《陰と陽》《華やかなる幻想》《夜をねむる》など11点を出品。1回だけの開催ではあったが、北海道における最初の創作版画展であった。続く10月の第19回黒百合会(9~11 中島公園・育兒園)に《静物》《行く所まで》(各油彩画か)などを出品。11月の札幌詩学協会第1回洋画展(11~15 札幌・太平館)にも出品か。また、1927年12月には、「西村博士送別作品展」(3~5 札幌・丸井 主催:さとぼろ社)が開催され、油彩画25点、淡彩スケッチ28点、木版画6点を出品。小熊捍らの賛助出品7点も並べた。1927年の北海道大学退官後は、大阪毎日新聞社に入社し、大阪府豊中市に住む。1928年人間型ロボット「学天則」を製作し、京都で開かれた昭和天皇御大札記念博覧会に出品。1936年大阪毎日新聞社会事業団に全国的な保育団体である「全日本保育連盟」結成。初代理事長に就任。1945年大阪毎日新聞を退社。戦後は、1947年に大阪府豊中市市議会議員に当選。その後、豊中市中央公民館館長となり、また神戸市の頌栄短期大学で生物学などを教えた。1956(昭和31)年1月4日大阪府豊中市で逝去。【文献】今田敬一『北海道美術史 地域文化の積み上げ』(北海道立美術館1970) / 『札幌・大正の青春—雑誌『さとぼろ』をめぐる一—』(札幌市教育委員会 1978) / 荒俣宏『大東亜科学綺譚』(筑摩書房 1991) / 井内佳津恵『田上義也と札幌モダン—若き建築家の交友の軌跡』(ミュージアム新書22 北海道新聞社 2002) / 長山靖生『奇想科学の冒険 近代日本を騒がせた夢想家たち』(平凡社新書379 平凡社 2007) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

西村義人(にしむら・よしと) 1910~1982

1910(明治43)年熊本県宇土郡不知火村に生まれる。1931(昭和6)年東京美術学校卒業後、兵庫県立伊丹中学校教諭を経て、1936年福岡県立柳川高等女学校教諭となる。1938年朝鮮に渡り、同年釜山中学校教諭、1940年晋州師範学校教諭に転任し、同年応召される。戦後は帰郷し、熊本市内の中学校で教諭として活動の傍ら、1954年頃より絵画制作を再開。1957年第8回日展に油彩画《静物》が初入選、以降8回入選を重ねる。1968年退職し、同年8月渡仏(翌1969年11月まで)。1972年清原武則・西山進と「三樹社」を結成、同年第1回展、翌1973年第2回展を開催する。1982(昭和57)年11月逝去。没後、2010年に宇城市不知火美術館で「生誕100年記念 西村義人展」が開催され、『西村義人 生誕100年記念画集』(西村義人生誕100年展実行委員会)が刊行された(未見)。版画の制作は、戦前の釜山で清永完治が発行した版画誌『朱美之集』第3冊(朱美之会 1940.12)に《小品》(単色木版)を発表。当時の住所は晋州府大正町34。なお、1934年8月武藤完一が中心となって大分県師範学校で開催された第6回夏期回画講習会(講師に西田武雄を迎えたエッチング講習会 1~5日)の参加者で、当時福岡県山門郡城〔内〕村で教員勤務と思われる「西村義人」のエッチング《〔教室風景〕》が『エッチング』22号(1934.8)に掲載されているが、前述の『朱美之集』第3冊の発表者と同一人かは確認できていない。【文献】宇城市不知火美術館「西村義人年譜」(2010) / 辻(川瀬)千春「植民地朝鮮における創作版画の展開(5) —釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について—」『名古屋大学博物館報告』32(2017) / 『エッチング』22(樋口)

西本信次郎(にしもと・しんじろう)

兵庫県では、1935年に阪田吉郎が版画への理解とその普及をめざし、「西日本新版画制作普及協会」を創設し、その機関誌として趣味の版画研究誌『西日本新版画』を発行する。その第1年2輯(1936.10)に《車中書見》《風景》《スケッチ帳より 街頭書見》、第2年1輯(1937.3)に《会長》、第2年2輯(1937.7)に《版画閣》、第2年3輯(1937.12)に《大阪ユキ急行列車》、第3年1輯(1938.4)に《車中読書》を発表。現在『西日本新版画』は1-2、2-1~3、3-1、3-2の6冊を確認している。【文献】『西日本新版画』2-3・3-2 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

新田 穰(にった・じょう) 1905~1949

1905(明治38)年3月7日和歌山県東牟婁郡勝浦村に生まれる(一説に1904年生)。和歌山県立新宮中学校に学ぶも、在学中に父が亡くなり中退。大阪商船株式会社(勝浦支店か)に事務員として勤める。1929年頃より中学時代の同級生杉本義夫と版画の研究を始め、1931年の第1回新興版画会展(6.21~25 新宿・三越、大分展:8.5~6 大分市竹町・丸吉)に木版画《タンクのある風景》《勝浦風景》が初入選。展評には「タンクのある風景には、聊かデッサンの不満はあるが版画として生きてゐる、もつと白と黒の版画を御勧め致したい」(きつつき一會員「新興版画第一回展覧会批評」『版画 CLUB』3-2)とある。翌1932年の自刻賀状葉書展(1.16~20 神田・文房堂)に出品。図版は『版画 CLUB』第4年第2号(1932.2.20)に掲載された。その後も5月の第7回国画会展に《湯川風景》、6月の第2回日本版画協会展に《窓外風景》《海岸の岩》《勝浦港風景》《風景》が入選。『版芸術』第9号全日本版画家年賀状百人集(白と黒社 1932.12.1)に《年賀状》を発表した。また、同年4月には小野忠重らによる「新版画集団」の結成に参加し、同集団の機関誌『新版画』第1号(1932.6.20)に《忘帰洞》、第2号(1932.7.10)に《紀伊国勝浦港風景》《紀伊風景》、第4号(1932.9.15)に《とりとめもない風景》として《吹屋の街》《樹間の海》《勝浦港外風景》《勝浦港内風景》《那智村風景》の5点、第5号(1932.10.10)に《〔日〕傘》、第6号(11.15)に《南紀小品》《南紀風景(瀧)》、第9号(1933.6.13)に《女習作》を発表。『賀状集 新版画』(藤牧義夫編 1934.2)にも作品を寄せた。また、同集団の第1回展(1932.10.15~20)に《風景A》《風景B》《紀伊勝浦風景A》《紀伊勝浦風景B》《紀伊勝浦風景C》、第2回展(1933.3.1~6)に《紀伊勝浦風景》、東京新版画集団展(1933.7.19~21 岐阜・丸物)に《紀伊勝浦港風景》《忘帰洞》、第1回版画アンデパンダン展(1934.6.12~14 神田・東京画廊)に《紀伊勝浦風景》を出品。この版画アンデパンダン展出品を最後に「新版画集団」から離れたようである。退団後は、1935年の第4回日本版画協会展に《南紀風景A》《南紀風景B》、翌年の第5回展に《南紀鬼ヶ島A》《南紀鬼ヶ島B》《南紀勝浦》を発表している。一方、地元にあつては、1932年に杉本義夫らと創作版画の団体「熊野きつ・き会」を結成し、第1回展(5.19~21 会場不明)に《勝浦風景》など20点を出品。翌1933年1月に版画集『勝浦風景画帖第一輯』(黒白版画15点 限定100部 未見)を自刊。10月には「全熊野美術協会」(後に「熊野美術協会」と改称)の結成に参加。版画部の会員として、第1回展の出品作品は不明だが、1934年の第2回展(5.11~14 新宮公民館)に《海》《溪流》《夏山風景》《森浦風景》《瀟》《「八呎鳥」の表紙》を出品(同展はその後も1942年頃まで開

催されたが、目録は未確認)。1937年11月には版画集『創作木版 南紀風景』を自刊。その前後か、大阪商船を辞め、新天地を求めて朝鮮半島に渡り、作品制作に専念。1938年には版画・パステル展(6.28～30 京城・三中井)を開催したが、やがて生活に困窮し、時期は不明であるが帰郷。帰郷後は新宮に住み、杉本の父の世話で木材協同組合や新宮市民病院の事務員として働きながら、作品を制作。戦後は、1947年に杉本らとともに「全熊野美術協会展」の再建に参画し、再び版画を出品したものと推定される。1949(昭和24)年5月8日和歌山県新宮市で逝去。【文献】『第一回新興版画会出品目録』(1931)／『版画CLUB』3-2、4-2(1931.9、1932.2)／『郷土図画』1-5(1931.10)／『新版画集団第一回展覧会目録』『新版画集団第二回展覧会出品目録』『東京新版画集団展覧会出品目録』『第1回版画アンデパンダン展覧会目録』(1932・1933・1933・1934)／『第一回版画展覧会出品目録』(熊野きつゝき 1932)／『第二回全熊野美術展目録』(1934)／『和歌山の作家と県内洋画壇展<1912-1945>』図録(和歌山県立近代美術館 1984)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

布尾良作(ぬのお・りょうさく) 1905～1992

1905(明治38)年10月8日富山県氷見郡窪村に生まれる。旧姓は東海。1921年氷見郡立農学校を卒業し、富山県師範学校に進学。在学中は美術部に籍を置く。1925年同校を卒業し、氷見郡十二町尋常小学校の教員となる。翌年布尾節子と結婚し、布尾姓を名乗る。1928年退職し、県師範学校の専攻科に進み、「図画・手工」を選修。翌年専攻科を修了し、氷見郡今町尋常高等小学校に図画教員として勤務。1934年文部省教員検定試験を受け、「師範学校中学校高等女学校教員(西洋画・用器画)」に合格。1936年から富山県立氷見高等女学校に勤務し、図画と書道を教える。またこの頃、東一雄(富山県立氷見中学校)らと洋画研究会「蒼潮会」を結成。公募展への初出品の時期は不明であるが、1938年には第15回白日会展に油彩画《婦人像》が入選。また、同年夏に富山中学校で開かれた「夏期エッチング講習会」(8.9 講師:西田武雄・小野忠重)に東らと参加。『エッチング』第70号(1938.8.15)に受講記「エッチング試作の感想」を寄稿し、自作のエッチング《[校庭]》の図版が掲載された。翌1939年には小野らが主催する第3回造型版画協会展に《愛馬と征く》《倉庫人夫》[共に木版画か]が入選。続く1940年は、第27回光風会展に油彩画《織筵母子》、造型版画協会展第4回展に木版画《稲扱母子》が入選。《稲扱母子》について、北川桃雄は「ガツシユで描いて[いる] 絵みたいだネ。苦心の割には版画としては損してゐる」(『現代の版画—造型版画展評—』『浮世絵界』5-7)と評している。その後も第28回光風会展(1941)に油彩画《少女》、第30回展(1943)に油彩画《日曜日》を出品した。他に大潮会展・新構造社展にも出品したようであるが、詳細は不明。戦後も引き続き氷見高等女学校の教員として勤務していたが、1948年からは富山県立氷見高等学校に異動。1949年の「富山県洋画連盟」や1964年の「氷見市美術協会」の結成に参画したほか、富山県展(1946～1991)や氷見市展(1963～1992)にも出品。また中央展には、1953年の第39回展から再び光風会展に出品するようになり、第40・65回展(1954・1979)を除き、1972年の第78回展まで毎回出品し、1957年の第43回展で会友、1961年の

第47回展で会員となった。また、1954年の第10回日展にも初入選し、1958・1962・1965年を除き、1966年の第9回新日展まで出品した。1966年氷見高等学校を退職。1968年に氷見市美術協会副会長、1974年からは会長を務めた。なお、晩年は画名を「良策」に改めている。1992(平成4)年10月1日富山県氷見市で逝去。1995年には氷見市立博物館において特別展「布尾良策展 I—日展と光風会展出品作を中心として—」(10.20～11.12)が開催された。【文献】『造型版画協会第三回展目録』『造型版画協会第四回展目録』(1939・1940)／『白日会展総出品目録(第1回～第59回)』(白日会 1984)／『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944.3)／『第85回記念光風会目録集』(光風会 1999)／『布尾良策展 I—日展と光風会展出品作を中心として—』図録(氷見市立博物館 1995)／『エッチング』68・70・71(三木)

沼 久夫(ぬま・ひさお)

1932(昭和7)年の第5回プロレタリア美術大展覧会(11.18～27 東京自治会館)に版画《白テロ、シコウライ》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

沼尾日乃(ぬまお・ひの)

東京府下野方の沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会は「常に印刷に關はつてゐる關係上、石版、銅版など復興的な仕事をやってみますが、創作の上にもいゝ作品、作者が現れることゝ信じます」という思いで、『日本印刷学校 創作版画作品集』を發行する。その第2輯(1932.3)に《浴後》を発表。『版画CLUB』第4年3号(1932.3)の「新刊紹介」において、この作品集を評者藤森静雄は「大変いいものである」と高く評価している。第2輯のみ確認(創刊号は未見)。なお、「日本印刷学校」は社会教育者であり社会運動家の希望社・後藤静香が勤労教育実践のために印刷技術者の養成学校として設立したもの。【文献】『日本印刷学校 創作版画作品集』2／「勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香」(インターネット・検索『神保町系オタオタ日記 2016-09-23』)(加治)

根上富治(ねあがり・とみじ) 1895～1981

1895(明治28)年1月5日(『日本美術年鑑』昭和57年度版による、25日との説もあり)、山形県酒田市に生まれる。本名は富治(とみはる)。莊内中学校卒業後、東京美術学校日本画科に入学、結城素明に師事する。傍ら本郷絵画研究所で岡田三郎助にも洋画を学ぶ。在学4年時の1921年に第3回帝展で日本画《雨後軍鶏の図》が初入選。1922年同校卒業。同年10月の第4回帝展に《銅鷹》が特選となり、以降は帝展(第5・6・8～11・13回展)・新文展(第2・5・6回展)に出品を重ねる。また1937年頃より帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)で教鞭をとる。1938年川崎小虎・野田九甫らと「日本画院」を興し同人となる。戦中は鶴岡に疎開。1941年椿貞雄・新海竹蔵らとともに山形県美術協会結成に参加。戦後は東京に戻り、1949年から日展委嘱となり、日展・日本画院などに出品する。1981(昭和56)年1月14日逝去。版画は、荻生天泉・永田春水との木版画集《瀬戸内三代》(大阪鉄道局 1935)に《[鞆の浦 仙酔島]》(仮称)1図が知られる。【文献】『近代絵画—東北の100年展』図録(宮城県美術館ほか 1989)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)／『山田書店新収美術目録』93(2010.7)(樋口)

根市良三 (ねいち・りょうぞう) 1914 ~ 1947

1914 (大正3)年11月12日青森市安方町に生まれる。幼時より芸術に才を見せ、尋常小学校の頃から文章や詩歌・挿絵を残す。1927年県立青森中学入学、同期に関野準一郎や佐藤米次郎・福島常作らがいた。1930年に佐藤と柿崎卓治とともに「緑樹夢社」を結成、創作版画誌『緑樹夢』を発刊。木版画を手がけ、同2号(1930.9)に『少年像』《艦隊入港》《暑中御伺》を、同3号(1931)に『表紙絵』《トンネルの見える風景》《山》を寄せた。1931年に「緑樹夢社」を「青森創作版画研究会」に発展的解消し、6月に『彫刻刀』を創刊して『曇天石棧橋』を発表。翌年4月の9号にも『オカリナ吹きと友情』で参加するが、それにて同会を退き、8月に柿崎や松下千春らと新たに「餘人社」を結成して『純』を創刊、9月の1号に『風・波』《白》を寄せた。県外の創作版画誌では『版芸術』5号(1932.8)の『浅虫・鳥頭岬』、『白と黒』37号(1933.7)の『白の練習作(一)』、また『版芸術』や『版画 CLUB』への年賀状の掲載が確認できる。この間、1931年の創作版画倶楽部主催・第1回新興版画展に『殺人幻想』が入選、同年の日本版画協会第1回展に『秋の部屋』が初入選している(以後第2・3・5・13回展に出品)。彫摺の技術は高く、時にシュルレアリスムの構成を思わせる、詩情漂う作風を持ち味とした。1933年に個人木版画集『魚図集』を完成させて上京、翌年4月文化学院美術部に進み、石井柏亭に師事して油絵を学ぶ。また棟方志功の講義も受けたという。同じ頃石版画にも取り組んだとされる。1937年文化学院を卒業して帰郷、1941年再上京。1943年日本版画奉公会会員。戦中は国展にも木版画を出品し、同年の第18回展と翌年の19回展に入選。1944年3月「根市良三創作版画個展」を銀座ギャラリーにて開催、同じ頃恩地孝四郎の「一木会」に集い、同年9月の『一木集』Iに『貝とバラ』を寄せ、武井武雄の主催した「榛の会」にも参加。1944年の日本版画協会第13回展では会員となっている。同年帰郷。生来病弱だったが1945年頃より体調を崩し、戦後も創作を続けて1946年5月の『一木集』IIに『黒いバラ』を寄せるも、これが絶作となった。1947(昭和22)年5月24日青森県東津軽郡平内村の国立青森療養所にて32歳の若さで逝去。日本版画協会は翌年の第16回展で遺作24点を展示してその早逝を惜しみ、また遺族からの寄付を受けて「根市賞」を設立している。【文献】『根市良三画集』(津軽書房 1969) / 『牀上小唱 根市良三遺稿集』(津軽書房 1969) / 『版ニュース』5(輝開 2000.10) / 『緑の樹の下の夢 青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001) / 對馬恵美子編「根市良三版画作品目録」『調査研究年報』29(青森県立郷土館 2005.3) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(西山)

根来菜山 (ねごろ・らいざん) ➡川面義雄 (かわつら・よしお)

根本霞外 (ねもと・かがい) 1899 ~ 1975

1899(明治32)年12月10日東京市に生まれる。本名は治兵衛。大正期、松林桂月に日本画を学ぶ。1926年第1回聖徳太子奉讃美術展に『狐標別韻』を出品(第2回展にも『睡猫』を出品)、1929年の第10回帝展で『梨花淡月』が初入選。1939年の第3回新文展でも『烏骨雞』を入選させている。時期は不明だが前川千帆に木版画を学び、1935年の日本版画協会第4回展で『蟹』《ツマジロ蟹》《けし坊主》が初入選、以後1944年の第13回展まで連続

出品。その間1937年の第6回展で協会賞を受け、1939年より会員となった。1942年の日本版画協会上海展(中日文化協会虹口事務所)にも出品がある。同年の日本版画協会横浜展(横浜・野沢屋)で実務にあたるなど協会内の中心的なメンバーであり、1943年より協会事務所を自宅に置いた。同年日本版画奉公会会員。二度の戦災に遭い協会事務所は恩地孝四郎宅に移るが、戦後も会員として活動した。1960年協会を退会し、日本版画会(日版会)に参加。1975(昭和50)年5月25日逝去。【文献】『日本版画協会会報』30(1939.2) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所 2006) / 『日本版画協会史 1931-2012』(日本版画協会 2012)(西山)

根本宏行 (ねもと・ひろゆき)

1938(昭和13)年の第2回造型版画協会展に『山手風景』、翌1939年の第3回展に『山の手風景』を出品。版種は不明。出品時は横浜に住む。【文献】『造型版画協会第二回展目録』『造型版画協会第三回展目録』(1938・1939)(三木)

能美八重夫 (のうみ・やえお)

福岡県に生まれる。1931年東京美術学校彫刻科塑造部に入学。校友会版画部に属し、1932年の第14回版画部展覧会(7.16~17 東京美術学校・講堂前廊下)に出品した。彫刻家としては、在学中の1933年第8回国画会展に彫刻『弟の首』が入選。翌1934年の第9回展にも『習作』を出品。1936年2月には本郷新・柳原義達らと「造型彫刻家協会」を結成したが、後に退会。同年3月東京美術学校彫刻科塑造部を卒業。4月の第11回国画会展に『裸婦』を出品し、国画奨学賞を受賞。1937年の第12回展にも『女の首』を出品した。1939年の国展彫刻部解散後の活動は不明。1972年頃は愛知県瀬戸市藤四郎町に住む。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12)(三木)

野口紅涯 (のぐち・こうがい) 1899? ~ 没年不詳

1899(明治32)年頃の生まれか。日本画家田中頼璋に師事。関東大震災の記録画として1924年から1926年にかけて13回に分け頒布された木版画集『大正震災画集』(絵巻研究会編 日本版画社刊 全25図)に『中橋廣小路の惨状』《業平橋電車通》の2図を制作。【文献】清水 澄編『現代画家番附』昭和17年度改正版(美術倶楽部出版部 1942) / 『版画にみる東京風景-関東大震災から戦前まで-』展図録(大田区立郷土博物館 2002)(樋口)

野口徳次 (のぐち・とくじ) 1908 ~ 1999

1908(明治41)年1月29日宮崎県北諸郡高城村に生まれる。1925年宮崎県立都城中学校を卒業。母校の高城小学校の代用教員になり、翌年訓導を拝命。1927年油絵を始める。1928年山之口小学校に移り、翌年退職。1930年に上京し、川端画学校洋画科に学ぶ。1931年東京美術学校西洋画科に入学。岡田三郎助に学び、1933年の第1回東光会展に油彩画『青衣座像』が入選。その後も第2回

展(1934)、第3回展(1935)と入選を重ねた。また時期は不明であるが銅版画を試作し、第5回日本版画協会展(1936)に《婦人坐像》が入選している。1936年松田貞子と結婚。東京美術学校油画科を卒業し、東京日日新聞社に入社。東京本社の子芸部記者となる。その後、事業部を経て、1940年ニュース映画部に移り、ドキュメンタリー映画を志す。1941年文化映画「阿波の木偶」を完成させ、その演出で文部省文化映画コンクール第2回文部大臣賞を受賞。1943年には理研科学映画社に移った。1945年応召されるも終戦と同時に帰郷復員。戦後は理研科学映画社に復帰したが1947年退職。1948年郷里高城町に戻り、宮崎県高城高等学校に奉職。以後、美術教師の道を歩み、1970年県立都城泉ヶ丘高等学校を最後に退職。その後も、東和大学・純真女子短期大学・宮崎女子短期大学・都城国立工業高等専門学校などの教授・講師として美術教育に尽力するとともに、高城町文化財保護委員会(のち高城町文化財保護審議会 1952～1999)、高城町史編纂委員会(1973～1990)の委員・委員長、都城市立美術館初代館長(1981～1997、顧問:1997～1998)などを歴任。またその間、50歳を機に公募展に出品するようになり、1958年の第43回二科展に初入選。以後入選を重ね、1970年に二科会会友、1981年に二科会会員となり、晩年まで出品を続けた。1982年に第33回宮崎県文化賞(芸術部門)、1988年に第20回都城市文化賞(芸術部門)を受賞。1998年には文化庁の地域文化功労者表彰を受けた。1999(平成11)年3月11日宮崎県高木町で逝去。2001年には都城市立美術館で「野口徳次追悼展」(3.9～27)が開催され、『野口徳次画集』が刊行された。【文献】『野口徳次画集 1908～1999』(野口徳次展を開く会企画・編集 野口敬介 2001)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

野口駿尾(のぐち・としお) 1881～1946

1881(明治14)年東京に生まれる。1901年東京美術学校日本画科卒業。1906年フランスへ留学し、室内装飾を学んで帰国。1908年前田侯爵家の本郷にある邸の洋館の室内装飾を依頼される。また、1910年明治天皇前田邸行幸に際し、画商林忠正がフランス滞在中に収集した300点を超える絵画のなかから、邸を飾る作品を黒田清輝とともに選定する作業に従事した。1911年国華社と並んで日本・東洋美術史研究の一翼を担ってきた審美書院の設立当初からの幹部一同が事業不振の責めを負って退陣した後、主幹の一人として運営を引き継ぐ。1916年日本の「南洋群島」占領に刺激され、海軍御用船「吉野丸」に乗船してマリアナ、カロリン、マーシャルの各諸島を巡行した。1917年その成果を前南洋群島防備隊司令官海軍中将東郷吉太郎題歌挿入の画集「椰子の下風」として刊行した。同画集に挿入された第36図の「ヤップ島アバイの装飾画」は石版印刷。1930年代前半に審美書院の六代目社長となるが、経営に不案内だったため、星岡茶寮の会員だったことが縁で知り合った便利堂四代目社長の中村竹二郎を常務取締役(兼任)に迎え、この出版社を経営した。ちなみに日本窒素肥料(現・チッソ)を中心とする日窒コンツェルンを一代で築いた野口遵は実兄であり、遵の親族が審美書院の筆頭株主となっていた。1943年5月日本版画奉公会が結成、会員名簿に「京橋区銀座西三ノ三審美書院/野口駿尾」と記載されている。野口による版画の実作は見当たらないが、高度な複製木版を図版

掲載してきた審美書院の社長としての加入であったと推定される。洋画家の南政善は娘婿にあたる。【文献】村角紀子「審美書院の美術全集にみる「日本美術史」の形成」『近代画説』8(1999)／『美術家たちの南洋群島展図録』(町田市立国際版画美術館ほか 2008)(滝沢)

野口久雄(のぐち・ひさお)

東京府下野方の沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会は「常に印刷に関はってゐる関係上、石版、銅版など復興的な仕事をやっておりますが、創作の上にもいゝ作品、作者が現れること、信じます」という思いで、『日本印刷学校 創作版画作品集』を発行する。その第2輯(1932.3)に《カナカの女》を出品。『版画 CLUB』第4年3号(1932.3)の「新刊紹介」において、評者藤森静雄はこの作品集を高く評価し、野口の作品についても「全体に受ける色調や量感から大変よいものを感じる」と感想を記している。野口はこの『日本印刷学校 創作版画作品集』の前後に、詩集『白露』(希望社出版部 1931)と詩集『遍路』(美術総合研究所 1933)を上梓。1931年当時、東京府下野方沼袋112に在住。なお、「日本印刷学校」は社会教育者であり社会運動家の希望社・後藤静香が勤労教育実践のために印刷技術者の養成学校として設立したものだ。【文献】『日本印刷学校 創作版画作品集』2／『勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香』(インターネット検索『神保町系オタオタ日記 2016-09-23』)(加治)

野口三四呂(のぐち・みよる) 1901～1937

1901(明治34)年12月12日静岡県田方郡三島町に生まれる。本名は三四郎。和紙を重ね貼りして作る創作人形「三四呂人形」の作者として知られる。地元の小学校を経て、1914年に静岡県立葦山中学校に入学するも、2～3年で中退。その後の足取りははっきりしないが、東京や京都で写真館の見習いや映画の撮影に関わっていたという。また、遺された1929年のデッサンなどから判断すると絵画もかなり勉強していたようである。1928年頃から東京の三越(日本橋)の早撮り写真の技師として勤務。1929年に開かれた朝鮮博覧会(9.12～10.31 京城 主催:朝鮮総督府)の自動写真撮影館の技師として三越から派遣され、博覧会終了後は1カ月ほど朝鮮半島を旅行し、多くのデッサンを遺す。帰京後、三越を辞め、翌年にかけて埼玉県大宮に住む木彫家根橋佑宗の下で彫刻の手伝いをしながら張り子人形の制作を始める。1930年入野しげと結婚。この頃から人形の制作を本格的に始め、山田徳兵衛の勧めで1931年の第1回童宝美術院展(2.20～26 日本橋・三越 主催:童宝美術院)に出品。その後も毎年出品したという。また、この年(1931)東京の笹塚に写真館を開業。この頃は人形制作と共に木版画も手掛け、1932年の第9回白日会展に《車庫風景》、第2回日本版画協会展に《窓辺風景一》《窓辺風景二》が入選。また、前年の第8回白日会展に入選した《静物》も木版画であった可能性が高い。その後も、料治熊太の主宰する『版芸術』第9号全日本版画家年賀状百人集(白と黒社 1932.12.1)に《年賀状》、『白と黒』第32号郷土玩具創作版画集(1933.2.1)に《九州五島鯨》、『版芸術』第18号(1933.9.1)に《鯨》を発表したが、人形制作に専念するためか、この頃を最後に版画展や版画誌への発表を止めている。1934年には野口光彦・堀柳女・鹿児島寿蔵と人形美術団体「甲戌会」を結成し、新しい人形の創作を目指して、仲間たちと積極的に交流。1934年6月に妻(25

歳)、翌1935年5月に長女(3歳)を亡くし、笹塚の写真館をたたむなどの不幸が重なったが、1936年の第1回総合人形芸術展(6.26~7.3 日本橋・白木屋 主催:人形芸術院)に《水辺興談》を出品し、最高賞の「人形芸術院賞」を受賞。新進の創作人形作家として高い評価を受けた。その後、結核が悪化し、長男を連れて帰郷。1937(昭和12)年2月22日静岡県三島で逝去。4月には旧友たちにより「故野口三四郎君遺作展」(4.7~8 三島・丸福呉服店)が開かれ、人形55点と朝鮮旅行中のスケッチ・自画像などの他、風景及び静物の版画7点が出品された。【文献】『三四呂人形—野口三四郎の芸術—展図録(三島市郷土資料館 2005)』/『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

野口利太郎 (のぐち・りたろう) 1887~1977

1887(明治20)年和歌山県西牟婁郡田辺町南新町に生まれる。号は「京不見」(きょうふけん・きょうみず)。東京・大阪の陶器店で丁稚奉公のち、家業の陶器商を継いだ。が、観賞石である「古谷石」の製作者としても全国の愛石家の間では知られた存在であり、1935年11月に「紀州古谷石展覧会」(日本橋・三越)を開催し、古谷石の名を高めた。また、田辺の墨匠鈴木梅仙の製墨の蒐集者・研究者としても著名であった。若いころから俳句を始め、河東碧梧桐の直門であったが、1932年頃から和歌(アララギ派)に転じたという。歌人・詩人・画家・学者との交際も多かったが、特に南方熊楠を敬愛し、熊楠没後も南方側近として、熊楠の顕彰に尽力した。版画は、1925年12月に洋画家原勝四郎と「版画展覧会」(中旬 田辺・会場不明 主催:田辺詩話会)を開催し、木版画《陶師われに土あり、日輪あり》などを出品したが、二人で約30点の出品であった。また、細尾しげる『蒼天に伸びる』(田辺詩話会出版部 1930)と小山邦松編『句集 花蜜柑』(紀伊新報社 1935)に木版による挿画があり、野口の追悼号である『くちくまの』第34号(1977.8)には、《山の薬師の願とき》《海蔵寺》(共に制作年不明)の図版が掲載されている。1976年には、長年にわたる地方文化への貢献を評価され、第7回田辺市文化賞を受賞した。1977(昭和52)年2月27日和歌山県田辺市下屋敷町で逝去。【文献】「特集 野口利太郎翁追悼」『くちくまの』34(紀南文化財研究会 1977.8) / 『紀伊民報』1925.12.4付 / 三谷渉「帰国後の原勝四郎についてのノート」『和歌山県立近代美術館ニュース』60(2009.3.31)(三木)

野崎三郎 (のざき・さぶろう)

1928(昭和3)年か、木版画による「東京百景」を計画する。翌1929年1月の第9回日本創作版画協会展に《五反田(東京百景ノ内)》《神田駅(東京百景ノ内)》が入選。1930年には中島重太郎の主宰する版画誌『きつつき』第2号(創作版画倶楽部 9.20)に《京橋際》を発表。1931年の第1回新興版画会展(6.21~25 新宿・三越、大分展:8.5~6 大分市竹町・丸吉)に《四谷駅》《だりや》が入選。展評には「両三年前より東京百景の作者であるのでつと多数の風景を見せて欲しかった、花は初めての試みらしい」(きつつき一會員「新興版画第一回展覧会批評」『版画 CLUB』3-1)とある。同年10月に個展(20~25 神田・一ツ橋画廊)を開催し、東京風景(「東京百景」)を中心に20点を出品。またこの頃か、『東京百景創作版画集』第1輯(10枚1組)を刊行。収録作品は《荒

川放水路》《本郷理化学研究所》《虎の門》《大井町》《築地》《新宿裏町》《数寄屋橋》《月島》《丸の内》《野方町》と表紙の《日本橋》であった。【文献】『第一回新興版画会出品目録』(1931) / 『版画 CLUB』3-1, 3-5, 4-3(1931.8・12, 1932.4) / 『郷土図画』1-5(1931.10) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

野崎新右衛門 (のざき・しんうえもん) 1911~没年不詳

1911(明治44)年三重県飯南郡松阪町に生まれる。川端画学校洋画科、春陽会洋画研究所に学ぶ。石版画を得意とし、1938年の第16回春陽会展に《アトリエにて》《或る男の像》《顔》が初入選。また、同年の第2回造型版画協会展にも《裸女》《裸女立女》《女》《男の像》が入選し、新版画家賞を受賞。恩地孝四郎に、「野崎新右衛門君の石版は潤達な技風で対象を強く表出することを覗つて快適ではあるが、も一つ踏み込むべきであつて、そうなれば当然もつと明確になる」(「展覧会評 造型版画第二回展」『みづゑ』400)と評されている。翌1939年も第17回春陽会展に《男の顔》《室内》《家の風景》《風景(一)》《夜の街》《群像》《婦人像》、第3回造型版画協会展に《室内》《風景》《立てる男》《少女》《群像》を出品したほか、第1回聖戦美術展に《戦線に居るA君》、第3回新文展に《室内》を出品。続く1940年は第18回春陽会展に《風景》《盲人》《ピヤホール》《少女》《ピヤホールにて》、紀元2600年奉祝美術展に《客席》を出品。1941年からは春陽会展への出品のみとなり、第19回展(1941)に《二人の女》《客席》《裸婦》《帽子の男》《月夜》、第20回展(1942)に《ある男》《裸婦(一)》《風景》《室内》《少女立像》、第21回展(1943)に《婦人像》《少女(1)》《客席》《二人像》を連続して出品した。1944年頃は東京都浅草区象潟町に住む。【文献】『造型版画協会第二回展目録』『造型版画協会第三回展目録』(1938・1939) / 『みづゑ』400(1938.6) / 『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944.3) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

野澤岩蔵 (のざわ・いわぞう) 1890~1963

1890(明治23)年栃木県河内郡姿川村に生まれる。1906年姿川尋常高等小学校を卒業後、同校で教諭助手として働きながら、本科正教員免許取得を目指し、猛勉強をする。1907年検定試験に合格。その後の勤務する学校は不明であるものの、1923年には姿川尋常高等小学校に赴任し、篠崎喜一郎・岩上清三郎ら版画誌『村の版画』の同人たちとなる先生らと知り合い、1925年の創刊に参加する。同誌は第7号(1926.1)で休刊状態になった後、1929年1月に8号が復刊するが、創刊号(1925.1)に《村の社》を発表したのをはじめとして、11号(1930.7)の《ギバウシ》まで、毎号作品を発表し続けた。その間、野澤は姿川第一尋常小学校に赴任。1934年頃から始めた考古学の調査・発掘に没頭し、1949年には教員を退職し、1952年に『関東先史考古図譜』を編纂。その後『郷土』『先史考古図』を上梓する。『村の版画』への発表をやめてからはほとんど版画制作を行っていないが、この図譜のほか著書で、自身で制作したと思われる土偶などの版画が挿図として掲載されている(未見)。なお、調査・発掘した考古学資料のコレクションは、1960年に宇都宮市重要文化財に指定されている。1963(昭和38)年に逝去。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画

誌の系譜』／「考古学部門活動記録」（インターネット検索『栃木県立博物館公式ブログ』2017）（加治）

野澤重治（のざわ・しげはる）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校5年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』（1928～1932）を再刊しようと鈴木嘉壽・小松行高ら当時の5年生が中心となって版画誌『刀 再版』（1940～1941）を創刊する。その第3号（1941）に《郊外》を発表。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録（鹿沼市立川上澄生美術館 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

野島貞政（のじま・さだまさ）

北海道名寄中学3年生在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第91号（1940.6）に里山を描いたセルロイド版作品が掲載されている。当時、名寄中学校には版画教育に熱心な教諭松田操がおり、松田自身版画制作を行なう一方で、図画教育の一環として生徒に銅版画技法の指導を行っていて、その様子を講習会の受講記や随筆などとして『エッチング』誌に投稿していた。野島も松田先生の指導を受けて制作を行ったもの。【文献】松田操「名寄講習日記」『エッチング』70（1938.8）／『エッチング』91（加治）

野添政治（のぞえ・まさじ）1911～没年不詳

1911（明治44）年の生まれ。京都市立第二工業学校陶磁器科を卒業。河合卯之助に師事する。1930年の第1回京都工芸美術展の出品は、目録未確認のため不明であるが、1931年の第2回展に《呉須絵花瓶》、1932年の第3回展に《タンポ・文花瓶》が入選。その後も第7回展（1932最終展）まで出品したと考えられ、時期は不明であるが京都工芸美術協会の会員になっている。また、1932年の第13回帝展にも《タンポポ文花瓶》が入選した。版画は、1929年の第1回京都創作版画会展（2.1～5 京都・大丸）に木版画《山科風景》《蹴上風景》《工場》《ダリア》、第2回展（会期不明 1932か）に《図書館》《一輪草》《風景》を出品。1944年頃は京都市東山区清水1丁目に住む。【文献】『第二回京都工芸美術展覧会出品目録』『第三回京都工芸美術展覧会出品目録』（京都工芸美術協会 1931・1932）／『創作版画・古版画展覧会目録』（京都創作版画会 1929）／『現代美術家総覧』（美術年鑑社 1944.3）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『（京都府総合）資料館紀要』12（1984）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

野田九浦（のだ・きゅうほ）1879～1971

近代日本画家、挿絵でも知られ、画塾「煌土社」主宰。1879（明治12）年12月22日、東京市下谷区上根岸に生れる。名は道三。父親の転勤に従い幼少期を函館で過ごす。1895年寺崎廣業に師事し、その画塾に学ぶ。翌1896年東京美術学校日本画科選科に入学するも、1898年の美術学校騒動により師とともに退学。日本美術院の研究生となる。同年（1898）正岡子規に俳句を学び、白馬会研究所で黒田清輝に洋画を学び、フランス語の勉強をする。和田三造らの版画誌『LS』（長野建吉編集 LS会 I・II 2冊 1905.7・8）に「野田道三」の名で同人となり作品を発表。1903年以降は美術誌『研精画誌』編集に従事。1907年第1回文展では日本画《辻説法》で二等賞受賞し、文部省買い上げとなる。同年に大阪朝日新聞

社に入社（1917年退社まで）し、朝日新聞連載の夏目漱石「抗夫」の挿絵を担当。1917年に赤松麟作・水島爾保布・幡恒春・永井瓢齋と木版画集『阪神名勝図絵』（金尾文淵堂）を刊行し、《大和田》《蘆屋》《三の宮》《青谷》《三田》《能勢》の風景を担当した。1924年には帝展審査員、この年に吉祥寺に転居、ただしアトリエは上根岸にあって通う。1931年刊の『日蓮聖人御伝木版画』『日蓮聖人全影』（六百五十遠忌報恩記念出版刊行会）の版画を結城素明・川崎小虎・池上秀敏・小堀頼音・木村武山・吉村忠夫・磯田長明等と担当。1937年文展審査員。1947年に帝国芸術院会員。1948年に金沢美術工芸専門学校（後の金沢市立金沢美術工芸大学）教授。1949年には日展常任理事。1965年には勲三等瑞宝章授章。1971（昭和46）年11月2日武蔵野市で逝去（カトリック名、ヨゼフ野田道三）。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

野田習之（のだ・しげゆき）

1931年に朝鮮釜山に移住した清永完治によって発行された版画同人誌『朱美之集』（1940～1942）に、朝鮮の風俗や風景を描いた木版画を発表する。第1冊（1940.5）に《早春》、第2冊（1940.8）に《少女の印象》、第3冊（1940.12）に《鉢里面》、第4冊（1941.9）に《仁王門の蹄声》、第5冊（1942.8）終刊号に《石窟庵十二面観音》を発表。また、その頃仁川府浜町に移住していた佐藤米次郎が青森の夢人社から発行した『趣味の蔵書票集』第5回（1940.11）には蔵書票《卦文様》を発表する。朝鮮総督府朝鮮美術展第16回（1937）から第23回（1944）まで工芸部門に出品。当時の住所は釜山府富民町3-10。戦後は染色家として活動。【文献】「第2回会員名簿」『朱美通信』2（〔1940.8〕）／『緑の樹の下の夢－青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／「辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開（5）－釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について－」『名古屋大学博物館報告』32（2017）」／『創作版画誌の系譜』（加治）

野田孝之（のだ・たかゆき）

西田武雄主宰の日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第34号（1935.8）に《東京駅》と題した銅版画を発表する。また『エッチング』第46号（1936.8）に銅版画《駅》が「東京 野田」の署名で掲載されている。【文献】『エッチング』34・46（加治）

野田稔昌（のだ・としまさ）1909～没年不詳

1909（明治42）年長崎県に生まれる。もとは詩人であり、具体的には不明だが、大正末に「文学に対する弾圧」から謄写印刷業をはじめた。1938年頃に工房「野田謄写堂」を構え、「美としての孔版の確立」と「文化の源泉を孔版印刷によって普及確立」することを目標に、戦後も孔版技術研究会を創立して活動を続け、1946年より謄写版による『詩と孔版 風』を刊行。1948年に、展覧会や座談会、研究会、技術指導会の開催、資材の分譲、工房の開放、機関誌発行を目標に「佐世保謄写人クラブ」を結成した。若山八十氏によれば、のちに東京へ居を移し、そこで没したという。【文献】黒水武夫編『後塵録』（日本謄写美術協会 1947）／若山八十氏『「孔版」と個人誌づくり』『ガリ版文化史』（新宿書房 1985）／『詩と孔版 風』14（紅桃社 風発行所 1948.5）（植野）

野田英夫 (のだ・ひでお) 1908～1939

1908(明治41)年7月15日カリフォルニア州サンタクララ郡アグニューに、日系移民の子として生まれる。米名はベンジャミン。日本で教育を受けるため、姉とともに熊本の伯父の家に預けられる。1926年旧制熊本中学を卒業、アメリカ市民権が切れる前に単身渡米し、オークランドのピドモンド・ハイスクールに入学。美術クラブに所属し油絵を学ぶ。1929年同校を卒業し、カリフォルニア大学付属美術専門学校に特待生入学する。働きながら学校に通い、壁画制作のために訪れていたディエゴ・リベラの助手をつとめた。1931年ニューヨークのアート・ステューデントズ・リーグ教授のアーノルド・ブランチに招かれて美術専門学校を中退、リーグに入る。リーグ先輩の山崎近道、鈴木盛とウッドストックで共同生活する。同地で国吉康雄・石垣栄太郎らに出会う。1932年ウッドストック・アート・ショーでウッドストック協会賞、サンフランシスコ美術協会展でマリア・ストーン賞を受賞する。この年アメリカ人ルース・ケルツと結婚しニューヨークに住む。この時期にリトグラフ作品の《少女像》(1932)を制作しているが、版画制作の経緯、全体は未詳。1933年リベラと再会しロックフェラー・センターの壁画制作を手伝う。また、この頃共産党のプロパガンダ機関である革命的作家集団「ジョン・リード・クラブ」に通い始めた。1934年第2回ホイットニー・バイエニアルに出品し作品が買上げられる一方で、政府雇用促進局(WPA)の仕事でシビック・センター内に壁画を制作した。またニューヨーク壁画連盟会員となってエリス島移民入国管理局の壁画を制作し始めたが、この年末に突然訪日する。この頃より本格的にアメリカ共産党の諜報活動を始めたとされる。1935年銀座の青樹社画廊で個展を開催、第22回二科展にも《帰路》《夢》を出品して日本画壇にデビューする。1936年ニューヨークに戻る。1937年母校のハイスクールの壁画を制作後、ヨーロッパ経由で再来日。第2回新制作派協会展に《サーカス》など全6点出品し、会員となった。1938年、来日したルース夫人や新制作派協会会員らと長野県野尻湖に避暑に出かけるが、体の変調を訴えて東京の病院に入院、1939(昭和14)年1月12日東京で逝去する。同年11月開催の第4回新制作派協会展で遺作室が設けられ22点が展示された。東京藝術大学教授を務めた版画家の野田哲也は甥にあたる。【文献】窪島誠一郎『漂泊一日系画家野田英夫の生涯』(新潮社 1990)／『アメリカに生きた日系人画家たち展図録』(東京都庭園美術館編 1995)／『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち展図録』(和歌山県立近代美術館 1997)(滝沢)

野田道三 (のだ・みちぞう) ⇒野田九甫 (のだ・きゅうほ)

野津佐吉 (のづ・さきち) 1907～没年不詳

1907(明治40)年鳥根県松江市に生まれる。鳥根県立工業学校修道館を卒業。その後、日本大学に学び、時期は不明であるが文部省教員検定試験にも合格している。1930年代は東京の小学校に手工科教員として勤務していたと思われるが、公募展へも積極的に出品し、1932年の第7回国画会展に木版画《風景》、第2回日本版画協会展に《松江風景》が入選。翌年も第8回国画会展に《風景》が入選した。1935年には勤務校であった深川の八名川小学校に西田武雄を招き、6年生を対象としたエッチング講習会(6.7～8)を開催。その時に制作したエッチング《[日

本橋]》は『エッチング』第33号(1935.7.15)に図版として紹介された。その後も、1939年の第14回国画会展に《風景》が入選。また、平塚運一の主宰する「きつつき会」の版画集『きつつき版画集』昭和17年版(1942.8.25)に《風景》、昭和18年新版(1943)に《ゆかた着の女》を発表。1943年の「日本版画奉公会」の結成にも参加した。戦後も小・中・高校の教員として美術を教えたほか、東京藝術大学美術学部(非常勤講師 1968.4～1970.3)・東京大学教育学部・東京教育大学などで美術工芸教育法・教育実習などを担当している。公募展への復帰は1947年の第21回国画会展からで、同展に出品した《山上春色》で褒状を受賞。1949年の第23回展で国画会版画部会友に推挙されたが、1962年1月に退会。また、1951年には日本水彩画会会員になっている。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』32・33／『原色 浮世絵大百科事典』10(大修館書店 1981)／『創作版画誌の系譜』(三木)

野中榮吉 (のなか・えいきち)

油彩画を手掛け、1929(昭和4)年の第4回国画会展に《花》が入選。翌1930年には第5回一九三〇年協会展に《本の静物》、第17回二科展に《花》が入選。二科展へはその後も、第19回展(1932)に《海の風景》、第20回展(1933)に《風景》、第21回展(1934)に《ベランダ》を出品。またその間、1932年に田坂乾らと「青丹会」を結成し、第1回展(10.26～30 銀座・紀伊國屋)を開催。翌1933年から1934年にかけて文化学院専修科に在籍したが、エッチングなどはこの時に学んだようで、西田武雄が指導した「文化学院第1回講習会」(1933.10.2～7)に参加。第2回講習会(1933.11.20～26)も参加したと思われ、『エッチング』14(1933.12)には2点の銅版画の図版が掲載されている。1934年3月文化学院専修科修了。11月の文化学院美術・工芸展(21～23 日本橋・高島屋)に卒業生として油彩画《五月》を出品した。版画は、1935年の第4回日本版画協会展には石版画《花》《海》、1940年の第1回日本エッチング展に《ポート図》を出品している。なお、『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』(資生堂企業文化部編 1995)では、自由美術協会会員の馬場龍三(はば・えいぞう)を野中と同一人とする。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』12・13・14・96／『創作版画誌の系譜』(三木)

野中重吉 (のなか・じゅうきち) 1909～1936

1909(明治42)年1月愛媛県宇和島市袋町に生まれる。関東大震災で帰郷(1923.9～1925.春)していた畦地梅太郎を知り、触発され画家を志す。1928年宇和島商業学校を卒業し、上京。小林萬吾の指導する同舟舎洋画研究所に学ぶ。また、畦地の紹介で平塚運一を知る。1929年3月の第16回日本水彩画展に木版画《南千住風景》が入選。藤森静雄は、「野中重吉君の「南千住風景」は極小品であるが全体としてほがらかさと底力を気持よく思つた。又省略による表現が相当によくきいて居る様であつた。石垣など殊にその感があつた様に思ふ。只前景に多少わざわざいした残痕があつた様である。」「(日本水彩画展版画小感)『版画 CLUB』1～2)と評している。同年、日本美術学校に入学し、大久保作次郎に学ぶ。12月の日本美術学校第11回展(1～5 有楽町・朝日新聞社画廊)に木

版画《甲州風景》を出品。1931年4月の第6回国画会に油彩画《曇り日梅林》、6月の第1回独立美術協会に油彩画《港風景》が入選。1932年日本美術学校を卒業。卒業後は、築地小劇場や地球座で舞台装置を制作するなど演劇にも関係したが、病を得て1934年4月に帰郷。郷里では図案・広告美術を扱う「トータス社」を設立したほか、俳句雑誌『なめとこ』（1935.6創刊か、未見）に版画と俳句（俳号は「木片」）、『南豫時事新聞』に「新宇和島百景」（画・野中、文・編集局同人、連載は没後も継続されたが61景までか）のスケッチを発表。また、会期などは不明であるが、3回の個展を開催した。1936（昭和11）年4月宇和島市役所税務課に勤務するも、病に倒れ、6月7日同地で逝去。その後、6月15日付の『南豫時事新聞』に大久保作次郎の追悼談話（畦地梅太郎記）、冬日荘主人・平塚運一・伊藤善二郎・宇治原草石らによる追悼文が掲載され、26日に「故野中木片君追悼俳句会」（袋町・野中魚店 主催：なめとこ発行所）が開かれた。また、東京でも7月7日に大久保・平塚・畦地らによって追悼会（丸の内・マープル）が開かれている。その後、遺作集が計画されたのか、畦地の毛筆メモのある『野中重吉氏遺作集見本』（単色木版画9点入）が遺る。【文献】『新宇和島百景』（私家本 野中峻 1989.12）／三輪田俊介「畦地さんが宇和島湾を眺めた頃」『畦地梅太郎展』（町田市立国際版画美術館 2001）／和南城愛理「畦地梅太郎と三人の画家―野中重吉・小林朝治・萩原吉二」『町田市立国際版画美術館紀要』6（2002.3）／『日本水彩画会第十六回展覧会目録』（1929）／『版画 CLUB』1-2・2-1（1929.5・1930.1）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『野中重吉氏遺作集見本』（『版画堂』カタログ61（2004.5）収録）（三木）

野長瀬晩花（のながせ・ばんか）1889～1964

1889（明治22）年8月17日和歌山県西牟婁郡近野村近露に生まれる。本名は弘男。1903年近野尋常小学校を卒業し、大阪の日本画家中川蘆月塾に入門。1907年京都の谷口香嶠塾に移る。1909年新設された京都市立絵画専門学校別科に入学。1910年第15回新古典美術展に《先生に見られて》を出品し、四等賞を受賞。翌1911年に退学。同年の第16回新古典美術展に《被布着たる少女》を出品し、三等賞を受賞。その後、反官展の姿勢を示し、個展などで作品を発表。1918年国画創作協会の旗揚げに参加。第1回展に《初夏の流れ》、第2回展（1919）に《休み時》、第3回展（1920）に《夕陽に帰る漁夫》を発表するなど、日本画壇に新風を吹き込んだ。1921年から翌年にかけて渡欧。1928年の国画創作協会解散後は、次第に中央画壇から離れたが、1946年には疎開先であった長野県屋代町で地元の画家・歌人らと「白炎社」を結成。1952年の第10回展まで出品し、地元の文化運動にもかかわった。版画は、大阪の柳屋画廊から1921年12月から翌年3月にかけて販売された《吉例柳屋宝船》（50銭）がある。1964（昭和39）年3月31日東京都泊江市で逝去。【文献】『美術と文藝』19・白連の巻（柳屋画廊 1921.12）／『国画創作協会の全貌』（光村推古書院 1996）／『野長瀬晩花展』図録（熊野古道なかへち美術館・田辺市立美術館 2008）（三木）

野々垣勇吉（ののがき・ゆうきち）

青森で佐藤米次郎と関野準一郎らが青森創作版画研究会・夢人社から版画誌『陸奥駒』（1933～1935）を創刊する。

その第16集（1934.12）特輯年賀状集に賀状を発表。【文献】『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

野原正夫（のらはら・まさお）

1936年8月27日、名古屋を訪れた西田武雄を囲む座談会に出席。長船一雄・浅井紫明らが中心になってこの頃に結成されたと思われる「名古屋エッチング協会」の会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47（樋口）

野間仁根（のま・ひとね）1901～1979

1901（明治34）年2月5日愛媛県越智郡津倉村に生まれる。1919年上京、川端画学校を経て1920年に東京美術学校西洋画科入学。1923年の第10回光風会に油絵が初入選、翌年の第5回中央美術展でも初入選（第6・10回展でも入選）。1924年の第11回二科展で《静物》が初入選した後は主に二科会を活動の場とし、1928年の第15回展で《夜の床》が樗牛賞、翌年の16回展で《ゼ・ふうるむうん》が二科賞を受けるなど活躍を見せた（1930年会友、1933年会員）。1931年より佐藤春夫や井伏鱒二、坪田譲治らと組んだ新聞や雑誌の挿絵でも名高い。版画はわずかな作例しか知られないが、エッチングを大正期から手がけたと思われ、1940年12月の日本エッチング作家協会による第1回日本エッチング展覧会に《スキーヤー》を出品。木版画は1927年に始めたとする資料もあるが不詳、戦後の1949年に《森の猿》を制作している。1979（昭和54）年12月30日東京都港区にて逝去。【文献】『エッチング』96／『近代日本版画大系』第三巻（毎日新聞社 1976）／『野間仁根画集』（三彩新社 1980）／Helen Merritt and Nanako Yamada, Guide to Modern Japanese Woodblock Prints: 1900-1975（University of Hawaii Press 1992）（西山）

野村 勇（のむら・いさむ）

明治期の石版印刷業界誌『虹』第1巻1号（1908.2）に石版画《虹交会用短書表図案》、1巻7号（1908.8）に石版画《獣王》《御安い避暑》、第1巻9号（1908.10）に石版画《天長節》《僕の弟妹》を発表。現在『虹』は1-1（1908.2）～3-6（1910.6）のうち、17冊を確認している。終刊は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

野村侯三（のむら・こうぞう）1909～没年不明

創作版画家で、小学校教員を経て校長職に至る。1909（明治42）年生まれ。1932年以降、5回にわたり国展へ油絵を出品。1941年新古典美術協会に参加。油絵・版画を出品し、会友に推薦される。1942年には同会会員となるが、1944年には脱会して「新日本美術協会」を中治武夫・木俣克喬・竹村猛児等と組織し、第4回展まで銀座で開催した。1943年の『エッチング』誌掲載の「日本版画奉公会会員名簿」に名前あり。1947年に新構造社展へ版画を出品。同年秋には二科展へ版画を出品。1948年に『版画・ゑばなし 馬と蒸気車』（四六判 兼六館）を出版。東京都港区立筈（こうがい）小学校の校長在任の1964年には、「版画を通しての」と「版画そのものの教育」を全教職員とともに構想・企画。具体的に教育カリキュラムを実践し、『版画を作る領域の系列とその指導・図画工作指導計画』としてまとめ発行した。【文献】野村侯三『履歴書』『版画・ゑばなし 馬と蒸気車』（兼六館 1948）／岩切信一郎「戦後の生活版画―児童の「版画」をめぐる―」『一寸』69（一

寸社 2017.12) (岩切)

野村 覚 (のむら・さとる)

長野県須坂の版画同人誌『櫟』第3輯(1934.7)に《飯山風景》を発表。『櫟』(1933～1937)は小林朝治が1933年に平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(会場:須坂小学校)を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げて創刊したもの。その後、長野県下水内郡の小学校教師たちが下水内郡手工研究会を組織して発行した版画誌『葵』(1934～1938)に参加。第1号(1934.9)に《姉妹》を発表している。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

野村達二 (のむら・たつじ)

『みづゑ』216号(1923.2)の「投稿欄」に「獨創と云ふこと」を寄稿。同号「版画欄」に《[男の肖像]》(木版賀状)の図版が掲載される。【文献】『みづゑ』216号(1923.2) (樋口)

野村田鶴子 (のむら・たつこ)

戦前の台湾において、1935年5月に当時台湾日日新報の記者だった西川満が中心になって結成した「創作版画会」に参加。同会第1回展(1935.10頃 後援: 灣日文藝部・学校美術社)に《顔》《門》の版画2点を出品している(木版と思われるが未確認)。また西川満私刊本の中の一冊、奥瑪開儼『四行詩集』(矢野峰人訳 日孝山房 1938)の口絵・挿絵を木版画で制作。西川の回想では、「版画も新鮮味を出すために、宮田〔弥太郎〕、立石〔鉄臣〕君とはちがう新人を選んだ。帝大に勤めていた野村田鶴子さんに三礼した。「木が固くて、彫るのに肩が凝って」とうら若い女性に怨まれて身の置き場がなかったが、手彩はわたしがした」とある。当時、台湾帝国大学勤務だったと思われる。【文献】『創作版画展1』目録(創作版画会 1935.10頃) / 西川満『わたしの造った限定本』天の巻(日孝山房私版 1966.6) / 西山純子「華麗島の創作版画—一九三〇年代・台湾—」『千葉市美術館研究紀要 採蓮』7(2004.3) (樋口)

野村俊彦 (のむら・としひこ) 1904～1987

1904(明治37)年東京生まれとされる(戸籍との照合は未確認)。野村家はそもそも信州松本の出身で、父が上京し事業を起こす。義兄(姉光子の夫)にあたる洋画家・河野通勢の影響もあり、当時、通勢の友人だった木村莊八に絵を学ぶようになる。1923年の関東大震災に遭い、災害を記録する木版画制作に着手。木村莊八が描く「荒都図絵の会」を起こし、絵はがきサイズの震災風景『荒都図絵』シリーズを多色摺(或は墨摺に手彩色)木版画にする。その彫を担当。同年11月頃にはこの『荒都図絵』第一集を出版。版画活動に入る。翌1924年の20歳の時に、日本大学へ入学するも直ぐに中退。河野通勢のアドバイスで伝統木版の彫師をめざすことになり、同年9月には彫師宮田六左衛門に入門し修業をはじめ。また同門の先輩である藤巻充寛(彫秀)にも学ぶ。しかし奉公5年修業のところ2年間で中途離脱。木村莊八宅に住み込み春陽会等の事務手伝をしながら版画制作を続ける。公募展へは、1926年の第4回春陽会展に木版画《風景》が初入選。以後、第5回～14・22回展(1927～1936・1944)に出品。翌1927年には第7回日本創作版画協会展に《風

景》が入選。以後、第8・9回展(1928・1929)に出品。第8回展で会友に推挙された。また、同年(1928)の第9回帝展に《片瀬海水浴場風景》が初入選。翌年の第9回帝展にも《高層より見たる丸ノ内》が入選した。1931年に結成された日本版画協会へは会友として参加。第1回展に《出を待つ踊り子》《踊り子二人》を出品。翌年会員に推挙され、その後も第3～5回展(1933・1935・1936)に出品したが、第4回展に出品した《競馬場にて》は珍しくエッチング手彩色であった。創作版画誌は、1927年に洋画家の土屋義郎・久泉共三・横堀角次郎らの原画に基づき、野村が彫り・摺りを担当した『版画』(創刊号1927.1のみ確認、第3号までか)を刊行。続く1929年には宮尾しげを・松村松次郎・旭正秀と『版画』(1929.2～1930.5 5冊か)を刊行し、第1号(1929.2)に《帝大風景》、第2号(1929.12)に《綱渡り》を発表。中島重太郎の『きつつき』創刊号(1930.7)にも《ダンスホールにて》を発表した。また、1931年に『東京風俗版画集』(東京風景8点)刊行。1936年10月には市ヶ谷駅前に高級喫茶店を開業、1938年8月には都新聞社へ入社など、版画では生活できず、様々な仕事に携わる。住まいは1930年には鶴沼海岸に、1932年には芝区新銭座町に住み、晩年は横浜市保土ヶ谷区西久保に住む。1987(昭和62)年10月19日逝去。【文献】岩切信一郎「版画家・野村俊彦」『東京文化短期大学紀要』17(2000) / 『創作版画誌の系譜』(岩切)

野村祐基 (のむら・ゆうき)

大分ではじめての版画講習会が創作版画倶楽部主催、講師平塚運一により1931年8月3～7日に大分県師範学校で開催された。開催を記念して武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)を創刊する(編集後記『彫りと摺り』創刊号)。当時、大分県師範学校の学生だった野村もこの版画講習会に参加した。その作品《椿》が第1号(1931.9)に掲載され、第2号(1931.11)に《倉庫》、第5号(1932)に《新議院の見ゆる風景》、第6号(1932.12)に《別府駅》を発表している。《倉庫》について、「秋の麗らかな日のスケッチ、落付のあるところに目を注ぎました。物静かなところの対象としてあくまで澄みきった空に真綿をひきちぎった様な雲が飛んでゐるのを組み合わせました」と「作者言」に言葉を寄せている。この作品には「S.N」とサインが入っているが、詳細は不明。【文献】『創作版画講習会其他版画展等』『郷土図画』1-5(1931.10) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

野村芳光 (のむら・よしみつ) 1870～1958

1870(明治3)年元紀州藩士の家に生れる。14歳で大分在住の初代野村芳国に学び、16歳の時に二代芳国に師事し「芳光」を名乗る。1892年頃、京都に来遊のフランス人画家ジョルジョ・ピゴーに洋画を習い、「パノラマ描法」を学んだ。版画の代表作は1930年の『野村芳光創作版画 京洛名處』(定価20円、限定200部)で、版元佐藤章太郎商店(京都縄手大和橋上ル西側)から発行。『浮世絵志』第18号(1930.6)の掲載広告の「略伝」中には「野村家は代々画家にて、芳光先生は其第四世たり。初代は歌川国芳の門人にて芳国と号し、三代まで此画号を継承す。現代芳光先生は幼きより父祖の薫陶を受け、浮世絵を学ぶ」とある。また、同掲載広告に『京洛名處』の題名として、《知恩院鐘楼》《八坂之塔》《伏見稲荷山》《廣

澤之月》《加茂堤之雪》《高雄秋景》の6点が示されている。しかし実際にはこれだけでなく、加えて、横判《二條橋より大文字を望む》と、豎判《清水産寧坂通》の出版が確認され、芳光の『京洛名處』シリーズは今のところ8点が確認される。1958（昭和33）年に逝去。【文献】『京都の近代版画－円山応挙から現代まで－』展図録（京都市美術館 1986）（岩切）

野呂 匡（のろ・ただし）

青森での最初の版画誌『緑樹夢』（1930～1931）に刺激された青森の若い洋画家たちは、佐藤米次郎の兄佐藤米太郎を中心に青森創作版画研究会・夢人社を設立。『緑樹夢』を吸収・合併し、版画誌『彫刻刀』（1931～1932）を創刊する。その第9号（1932.4）に《夜の雨》、第10号（1932.5）に《春》、第14号（1932.9）に《夏の海》を発表する。青森県師範学校校友会の発行した『郷土』第1号（1933.3）に「謡曲に見る伝説」を執筆しているところから、青森県師範学校出身と考えられる。1935年には『海道記新註』（育英書院）を上梓。【文献】『緑の樹の下の夢－青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）